



TITLE:

清代中後期の春秋左傳學(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

田, 訪

CITATION:

田, 訪. 清代中後期の春秋左傳學. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-09-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13047>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	田 訪
論文題目	清代中後期の春秋左傳學		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>『春秋左氏伝』（以下、『左伝』と略称）は經書なのか史書なのか、『春秋』の微言大義を闡明する「伝」か、それとも単なる歴史物語か。この二つの『左伝』観は、春秋学を今文公羊（穀梁）学派と古文左氏学派に二分する指標であり、漢代以来、ずっとせめぎ合ってきた。本論文では、『左伝』を「伝」と信じた者たちが、いかにしてそのことを証明し、またどのようにして『左伝』の義例を発見・構築していったかを考究する。</p> <p>考証の学を標榜する清代の左氏学者は、文字・音韻・訓詁の検討や歴史・地理・名物・礼制の実証という細部にこだわった学問だけを行い、『左伝』全体に関わる「義」には注目しなかったかのように見えるが、実は実証的な手法を通して義理を追求するのが彼らの真の目的であった。また、彼らが考証をする際に、多く『左伝』の義例にふれながらそれを論じたことは、容易に見て取れることである。さらに、訓詁や考証を行う一方で、専ら『左伝』の義例を考察した著作も少なくない。残念ながら、従来の清代の左伝学に対する関心は、おおむねその小学や考証の方法・成果、もしくは今古文学の論争に向けられ、清儒たちが『春秋』『左伝』についてどのような義例観を持っていたか、また先行する義例説をどのように取捨選択して義例を構築したかについては、詳細には論じられていない。以上の研究状況に鑑み、本論文は、左伝の義例観に重点を据え、清代中期に於ける『左伝』研究の集大成である『春秋左氏伝旧注疏証』と清代後期『左伝』研究の大家である章太炎・劉師培を対象とし、それらの義例観を明らかにすることによって、清代左氏学の新たな側面を開くことを企図するものである。</p> <p>以下、五章にわたる考察について、各章ごとの要旨を記す。</p> <p>第一章「礼経と凡例―『左伝』凡例研究の諸問題」。本章では、杜預の理解した「礼経」の概念を明らかにし、「周公礼経説」つまり「旧例説」の由来や成立を検討した上で、楊向奎氏・岩本憲司氏の研究成果を参照しつつ、「左氏例」とされる「五十凡」の性質を、「礼制を説明したもの」「書法を説明したもの」「礼制と書法との両方を説明したもの」の三類に分けて、その性格を再検討した。</p> <p>『左伝』は多くの歴史的事柄を記載した史書であるが、同時に「書」「不書」「書曰」などを通して『春秋』の書法を解釈した書物でもある。『春秋』の書法を解釈した書物であるからには、『左伝』が『春秋』の伝であることは間違いない。五十凡の中にはもともとの史官の書法も交じっており、五十凡は左丘明の一家言だという論断</p>			

は、決して正しいとは言えない。

また、杜預の「礼経」は、「礼の常法」を意味するが、内容上「経国の常制」と「史書の旧章」との両方を包含しており、すなわち杜預は周朝以来の治国の礼制のみならず、その史官の書法をも史官が従うべき「礼」と見なした。杜預の「周公礼経説」（「旧例説」）及び「変例」「非例」説はもちろん誤りではあるが、『左伝』の韓宣子の記事及び班固・賈逵の説を踏まえた上でさらに具体化したものであり、その基点は、旧来の礼法に『春秋』がのっとなっているということにある。

第二章「『春秋左氏伝旧注疏証』に於ける劉氏一族の義例観」。本章では、劉氏一族（劉文淇・劉毓崧・劉寿曾）が著した『春秋左氏伝旧注疏証』に見られる例目を蒐集整理し、杜預が『春秋釈例』に於いて列挙した例目と比較した。また、杜預の「非例」説や個々の義例論及び『公羊』『穀梁』の唱えた微言大義に対する態度という角度から、劉氏一族の義例観の特徴を論じた。

劉氏一族の『春秋左氏伝旧注疏証』の主旨は賈逵・服虔など漢儒の旧注を疏証し、『左伝』に記載される歴史・地理・礼制などを考証するということであるが、中には左氏義に関わる部分も少なくない。それは、劉氏一族は「伝例」を提示する以外に、各種の経・史資料及び清朝学者の論述を使用して、賈逵・服虔などの漢儒の注を蒐集して杜預の説と比較し、また左氏説と『公羊伝』『穀梁伝』との異同を明らかにすることによって、本来の左氏義例を明らかにしようと努めたからである。義例についての疏証は、なお部分的成果に止まってはいるが、学説の源流と異同を弁明するのに、際立った貢献をなしたものと評せよう。

漢儒は書法の相違に微言大義が常に存在すると考えたが、杜預は、多くの経文が旧史でありそこに義例はない（旧史は、用語の相違やテキストの欠落などのために書法の不同が起こったに過ぎない）と主張した。また、漢儒と同じく義例有りとした所であっても、価値規準が違うため、杜預の解釈もそれと異なる。漢儒の説を基準として擁護した劉氏一族は、杜預の特異な義例説を非難せざるを得なかった。

劉氏一族は、漢注が『公羊』『穀梁』二伝の義例を多く取って『左伝』を説くという事実気づいたが、漢注を尊崇擁護するため、往々にして三伝の大義が相通じるという結論を導いた。また、二伝の義例の中にも取るべきものがあり、それを用いて左氏の大義を補足することができると主張した。劉氏一族が漢儒説より導いた「左氏義」は、本当の左氏義ではない恐れがあるものの、その三伝を融通する柔軟な態度は従来の門戸の見を脱却した斬新な学風と認めることができる。

第三章「劉師培に於ける『左伝』の義例観」。本章では、先行研究の観点を再検討しつつ、劉師培の義例観を明らかにした。劉氏の義例観は以下のようにまとめられる。まず、全ての経文に義例があり、左丘明がそれに準じて伝を作ったとした。次に、「五十凡」と「君子曰」などの不凡には新旧の区別がなく、全て左丘明が経例を

理解発明したものとした。さらに、師法のある漢儒の説を遵奉し、彼らの具体的な義例説を整理して「時月日例」など八つの総例にまとめて総合し体系化した。

劉氏の義例理論の特徴は、漢儒の説に基づいた左氏学者の中で、初めて義例に焦点を置き、それを体系的に研究した点にある。彼が構築した理論は複雑ではあるが、体系性を有している。漢儒たちの具体例を一貫させて最も中心的な「八例」を構築したのは劉氏の独創であった。さらに、義例の基礎として「経例」「伝例」「正例」「変例」などの概念も従来の意味と異なり、彼の義例体系において新たな意味を有した。

第四章「劉師培の義例観と劉氏家学」。本章では、劉師培の義例理論を『春秋左氏伝旧注疏証』の義例説と比較し、両者の一致と相違を見ることによって劉師培の家学からの継承と発展を論じた。

まず、賈逵・服虔などの漢儒の義例説を尊び、それを確実な左氏例と見做すことは、家学と同様である。次に、『春秋』が経、『左伝』が伝という認識、また「君子曰く」は左丘明自らの評論であるという意見、さらに杜預の「周公礼経説」「非例説」や杜氏が整理した『釈例』に対する批判、という三つの点について、劉師培は完全にその家学に基づいているのである。

また、劉師培が立てた八例のうち、「時月日例」「名例」「地例」「詞例」の四例は『春秋左氏伝旧注疏証』に於いて既に立てられていたものである。劉師培はそれぞれの実例を蒐集整理し、各おのの正・変例の具体的な内容を確定しようとした。この正・変例を考案したことが、劉師培が家学に対して新たに発展させた部分である

さらに、「礼例」「事例」「錯文」「変文」の四例は、例名からして劉師培独自のものであり、内容的にも家学と一致するところは少なく、劉師培が漢儒の説をもとに導き出した特徴的なものであると考えられる。要するに、劉師培の義例理論は、その漢儒や杜預に対する基本的な態度を家学と同じくし、その内容は家学を整理して発展させたものなのである。

第五章「『春秋左伝読』に於ける章太炎の思考法と左伝観」。本章では、章太炎の早期の著作である『春秋左伝読』を取り扱い、そこに反映された『左伝』観を明らかにした。章太炎は、『左伝』の訓詁と大義の両方を重視し、今日まで残された左氏学者の断片的な引用や議論を蒐集整理することによって、『左伝』の訓詁と大義とを正すという手法をとること、また、訓詁の側面に於いては章太炎が特に賈誼・劉向の『左伝』に対する引用・議論を重んじ、大義の側面に於いては、章太炎が荀子・賈誼・賈逵・服虔の説以外に、『左伝』学者と認識された他の人物の上書をも広く集めて左史義を主張したことを明らかにする。

章太炎の『春秋左伝読』は、伝統的な小学、つまり訓詁を付し、文意を通じるという方法で『左伝』の杜注を正した著作である。訓詁の他、章太炎は先秦から後漢までの諸子の著作及び奏疏中に見られる『左伝』関係の材料を広く蒐集して検討し、『左

伝』が先秦時代から既に多くの経師に研究されていたことを証明しつつ、同時に『左伝』の大義がどこにあるのかを精察した。章太炎は、『左伝』の授受の系譜を確信した上で「『左伝』学者であれば必ず『左伝』の大義を説く」と考え、『左伝』学者とされた賈誼や服虔などの説を唱えつつ、時折『左伝』の義例は『公羊』『穀梁』と一致すると判断した。

最後の「結論」では、劉文淇ら・劉師培・章太炎の左氏義を主張する手法の相違を明らかにしつつ、その原因を探究し、その意義と局限性をも明らかにした。惠棟・洪亮吉・沈欽韓・張聰咸・馬宗璉・李貽德・儀徵劉氏などの『左伝』学者は、漢学の興起・繁栄時代に身を置き、その学問の重点は、杜預の学を覆して漢学を恢復させることにあった。彼らは漢代学者の古文経を読み解く方法、つまり訓詁・歴史・地理を明らかにしながら孔子の微言大義を追求するという道貫徹しさらに広げたわけだが、その学問の広さと深さは、漢儒のものとは比較にならない。訓詁・歴史・地理・義例を詳しく検討するほか、特に礼儀制度の考証から聖賢の大義を探究するという方針は、『左伝』の礼を重んじるという精髓を得ていると考えられる。

清末に至って、今文派の批判が盛んになり、『左伝』は『春秋』の伝であって劉歆の偽作ではないことを証明することが左氏学者の急務となった。章太炎・劉師培は『左伝』がすでに先秦・両漢の文献に引用されていることを主張しつつ、左氏義を熱心に論じた。章太炎はなお形式上乾嘉学風の影響を受けていたが、劉師培は訓詁・歴史・地理・礼制のあらゆる方面について考証するという煩わしい道を捨て、ひとえに漢儒が主張した『春秋』の大義と書法とを抽出して考察し、それを『左伝』の義例として立てる、ということに専念した。劉師培はさらに『春秋』『左伝』の性質や漢代学問の伝授を論じ、この二書は経・伝であり史ではないことと、微言大義が存在する合理性を強調した。このように劉師培が左氏の義例に集中し、経・伝に関する諸問題を総合的に検討することができたのは、その家学の綿密な考証成果を吸収したためである。

劉文淇らや劉師培・章太炎は、それぞれの時代に於ける学術的使命を大いに果たしたが、彼らの観念には少し瑕疵がある。つまり、漢学を理想的な学問とし、漢儒が敷衍した大義を直ちにそのまま左氏義とするため、時には賈逵・服虔の説が二伝と一致しており、三伝が相通じるところがあると主張したところである。その原因を考えると、やはり漢学に「師法」「家法」があるという意識にこだわりすぎたためであると思われる。

一方、杜預・孔穎達に対する評価も決して公正とは言えない。学術の源流、伝承や根拠を一層重視した清儒から見れば、杜預注には、注の由来を明確に示さないこと、訓詁や地理考証の粗雑なこと、古礼に無知であって「春秋大義」を誤解したことなどの問題がある。実は、杜預の時代に於いて、学説の由来を明確に示す規範はなお立て

られておらず、漢注の散逸の責めも全て杜預・孔穎達に帰することのできるものではない。むしろ、杜注が多く漢注に基づき、また孔疏が多く杜注を漢注と比較してその優劣の判断を下したため、杜・孔によって漢注がかなり保たれたというのが事実である。「旧例」「変例」「非例」という杜預の義例観は、確かに杜預の創造であって、その具体的な義例説の多くも、賈逵・服虔・許淑・穎容などの説を批判したものである。史的意識の高かった杜預は、『春秋』の多くは周代の史官から継承したものであり、全ての内容に孔子の微言大義が込められたわけではないと考え、微言大義のない箇所や周代の史官から継承してきた旧例を、孔子が微言大義を込めた箇所と区別しようとした。今から見れば、このような義例観は全く不合理とはいえない。しかし、劉文淇や劉師培は杜預の義例観と具体的義例説とを完全に否定し、『左伝』の五十凡を左丘明の個人的な意見に過ぎないものと見なした。このような説明では、いったい五十凡とは何かという問いに答えることはできないのである。

『春秋』『左伝』の義例は清代全体にわたる共通のテーマである。今回は義例が非常に強調された清代中後期に注目し、劉文淇らや劉師培・章太炎を中心として検討した。清儒が残した義例に関する著作はなお多く、その手法は往々にして「属辞比事」、つまり同類の事柄を並べて前後の書法を比較すること、に関わる。それらについての研究は、今後の課題としたい。

(論文審査の結果の要旨)

春秋左伝学とは、儒教の五經のうちのひとつ『春秋』についての「伝」である『春秋左氏伝』（以下『左伝』と略称）を研究する学問であるが、実は『左伝』が「伝」と認定されること自体が左伝学に課せられた根本問題であった。そしてその成否は、『左伝』に「義例」（『春秋』の書法の原則）有りや無しやに係っている。本論文は、その春秋左伝学の根幹である「義例」を中心に研究したものである。

漢学復興を主流とする清代経学において、左伝学も漢儒説を重視することになるが、そこでは単なる遺説の蒐集に止まり、また『左伝』をあくまでも史書とみて義例には関心を抱かない者もあった。従って現代の左伝学研究においても、本論文が問題にする劉文淇や劉師培、章太炎が義例に注目したことは指摘されるが、彼らが具体的な義例をどう考えたのかはほぼ研究されぬままであった。本論文はこの三者の義例観の綿密な分析をもとに、清代左伝学を新たな側面から解明した意欲的な論考である。

第一章では、本論文全体の前提として、『左伝』に義例が存在することを明らかにするために、それを批判する立場が『左伝』の五十の凡例が左丘明の一家言に過ぎぬとする議論のもつ問題点について考察を行う。論者は詳細な検討により、『左伝』に史法が存在したことは否定できず、左丘明の一家言ではないということを明示する。

第二章では、劉文淇にはじまる劉氏一族の義例観について『春秋左氏伝旧注疏証』を丹念に読み解きながら解明する。先行研究がさほど論及しない『公羊伝』『穀梁伝』との関係や、杜預との違いを考察し、さらに先行研究の「劉氏は日月例などの義例を用いない」という議論に疑問を呈する。論者は、劉氏が漢儒絶対視を徹底したことを示した上で、『左伝』に独自の義例があることを示すために、劉氏による漢儒の説の源流、さらに『公羊伝』『穀梁伝』との異同についての議論を詳細に跡づける。

第三章では、前章を承け、劉氏の学を引き継いだ劉師培を問題にする。論者は劉師培の義例観、特にその形成の経緯について注目し、劉師培が言う「経例」と「伝例」の関係について考察する。そして劉師培が孔子の「新例」と周公の「旧例」の区別を解消して『左伝』の義例の權威をすべて左丘明に帰し、「正例」「変例」として定義し直して『左伝』解釈による春秋の義例体系を確立したという状況を明らかにする。

続いて第四章では、前章で考察された劉師培の義例観について劉氏の家学との関係を考察する。先行研究において、義例説について詳細な記述がなされないまま、劉師培が家学から離れていることが強調されるのに対して疑問を呈し、継承発展させた面を明らかにする。そこでは「時日月例」などの八例の詳細な検討と、『春秋』と『左伝』の性格付けという二つの側面から考察がなされ、劉師培が家学を継承する部分、彼が独自に発展させた部分をあざやかに紡ぎ出す。

第五章では、章太炎の左伝学を、彼の初期の著作『春秋左伝読』の考察を通じて明らかにする。そこでは、章太炎が、漢代における左伝学者が『左伝』を用いて作った

文章に基づいて『左伝』の訓詁と大義を新たに見いだす過程を丹念にたどり、漢代の左伝学者は必ず『左伝』の大義を説くという章太炎の思想を詳細に跡づける。これは章太炎の左伝学の新たな側面として、今後の展開が大いに期待される部分である。

結論では、上記五章の考察をまとめた上で、劉師培の義例研究の二つの要因を論じる。そのひとつは、外的な要因として、清末の公羊学の台頭により、乾嘉の学においては自明のことであった、『左伝』が『春秋』の伝であることを、改めて明らかにせねばならないという要求、さらにもう一点、いわば内的な要因として、劉文淇らの劉氏家学による綿密な考証の結果、劉師培が『左伝』の義例の研究に専念することが可能になったことをあげ、劉師培の左伝学の新たな見方を提示する。

以上、論者が、劉氏が『左伝』が単なる史書ではなく、『春秋』の微言大義を解明する「伝」だとする信念に基づいて義例説を立て、そのために杜預の「非例」説や「周公経礼」説を乗り越えねばならず、また漢儒を重視するものの、漢儒の説を純粋な左氏説として取り扱うために今文説とは一線を画する必要があったと主張し、清代の左伝学において初めて義例に焦点を置き、体系的に研究した点に劉師培の左伝学の意義を主張したことは十分な説得力をもち、論者の創見として高く評価できる。

なお、春秋学が、研究に際して、礼学の素養とともに、特殊な用語などの取り扱いに独特の困難さを伴う主題であるとともに、さらに考察の対象として、難解をもって知られる章太炎の『春秋左伝読』や、歴大な劉文淇の『春秋左氏伝旧注疏証』をほぼ完全に読みこなしていることは高く評価できる点として特記しておきたい。

本論文に対する不満を強いて挙げるとすれば、各章とも分析・考察の仕方が基本的に同じであり、そのため全体としてやや単調さを覚えることであろう。もっともこれは、義例観の考察という主題からしてやむを得ざるところがあり、また考察対象自体が本来同様の傾向を有しているのである。ただ、『春秋左氏伝旧注疏証』については、より広い視野からの考察も可能であったように思われる。調査委員からも、『春秋左氏伝旧注疏証』を単純に劉氏一族のものとしてしまわずに、その成立の過程を考察して各人の特徴を分析する必要があったのではないか、さらに先行する左伝学者との関連に言及すれば、より充実した論となったのでは、との指摘がなされた。しかし、本論文が行った詳細な分析は、今後の研究の基礎作業として十分な意義を持っており、本論文をもとに今後論者がさらに考察を深めていくことと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2016年7月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。